

1)

担当：園山隆之

題： 治療容量での抗凝固療法は、D-ダイマーレベルの上昇した COVID-19 患者に対して有益ではなかった。

結論： 非盲検試験において、治療容量での抗凝固療法は全体の結果を改善せず、過度の出血と関連を認めた。

原題： Lopes RD et al. Therapeutic versus prophylactic anticoagulation for patients admitted to hospital with COVID-19 and elevated D-dimer concentration (ACTION): An open-label, multicentre, randomized, controlled trial. Lancet 2021 Jun 12; 397:2253.

本文： 他の呼吸器感染症と比べて、COVID-19 は高率に血栓塞栓症が生じている。さらにこれらの合併症はD-ダイマーの上昇した患者により多く認められると考えられている。そのような患者において、観察研究では治療容量と予防的投与量の両方を行うことで、院内死亡のリスクを低下させることが示唆されているが、対照試験は欠如している。この問題に対処するため、研究者達はブラジルの 31 病院に入院したD-ダイマーの上昇したCOVID-19 患者 615 名を対象に非盲検試験を組んだ。静脈血栓症の患者は除外した。患者はランダムイズに 30 日間のヘパリンでの標準的な予防的抗凝固療法群とリバーロキサソ、もしくはヘパリンでの治療的抗凝固療法群に割り付けられた。

30 日目までの死亡までの期間、入院期間、補助酸素投与期間などに関して両群に有意差は認めず、30 日目の時点で個々の血栓症の発症においても有意差はなかった。しかし臨床的に関連のある出血については治療的抗凝固療法群では 26 人(8%)、予防的抗凝固療法群で 7 人(2%)に生じた。(P=0.001)

コメント：

本研究からはD-ダイマーの上昇した COVID-19 患者において静脈血栓塞栓症の予防のために治療容量での抗凝固療法は行うべきではない。この結果は現在の指針を支持するもので、治療法を変更してはいけない。

2)

担当：大居慎治

題：バクテリオファージがヒトの病気に関係している

結論：2000 近くのファージ DNA 塩基配列とヒトの慢性疾患、特にパーキンソン病に関連がある

原題：Tisza MJ and Buck CB.

A catalog of tens of thousands of viruses from human metagenomes reveals hidden associations with chronic diseases.

Proc Natl Acad Sci USA 2021 Jun 8; 118:e2023202118

本文：

「腸に共生する細菌が肥満に関係する」と初めて報告された時 (2006 年 Nature)、とても奇異に見られた。その後腸内細菌が様々な疾患の発病に影響しているというエビデンスが蓄積されてきている。細菌の遺伝子が産生するタンパクが体内を循環し、影響を及ぼす。実際、我々の体内の細菌叢が第 2 のゲノムとして、あるいは内分泌臓器として働いていることになる。

我々の体内で住み続ける細菌に感染するウイルス (ファージ) についてはどうだろうか。これらのウイルスは我々に影響を与えているのだろうか。この疑問に対する研究は難しいが、最近の報告によると技術的な制限を乗り越えることができると言っている。研究者たちは 6000 ものヒトからの検体 (主に便と唾液) で核酸の塩基配列を調べた。この中には体内の細菌やウイルスのものも含まれている。その結果 2000 以上のバクテリオファージが、いろいろな慢性疾患と、特にパーキンソン病と肥満に関連していることがわかった。多くのウイルスの核酸塩基配列がヒトの染色体 DNA や環状エピソームに組み込まれているのである。

コメント：

ヒトのウイルス叢 (virome) についての研究は、特に我々自身の細胞よりもむしろ共生細菌をターゲットにしているウイルスについての研究はまだ早期の段階である。しかしこの研究はバクテリオファージが人の疾患と関連があり、多分病因に結びついていることを示唆している—それが (ファージが) 共生細菌の数と機能 (働き) に影響を及ぼすことによって、あるいはより直接的に作用することで。